私の戦争体験記

今井ミヨ（三山・76歳）

昭和二十年三月九日の夜、私（当時三十二才）は東京の浅草で空襲を受けました。当時、金物屋を営む主人（当時四十六才）を助け、六才の長女を頭に、四才の次女、生後二ケ月の長男の世話にあけくれておりました。

九日の夜は、三人の子供が次から次への百日ぜきにかかり苦しんでいるところへの猛爆撃でした。生まれたばかりの長男をねんねこにくるんで抱いて、次女を背中におんぶして、長女の手を引いて着のみ着のまま逃げました。あたりは火の海、とにかく三人の子供だけは絶対はなしてはならないとしっかり手を引き、必死の思いで逃げました。すぐ近所のお寺の墓を通って小学校に避難しました。資材置場になっていたところを防空壕として使い、はしごをかけてその中に入りました。中は真暗で満員でした。身動きもできない状態なのに、子供がおしっこをしたいといいだし、人をかきわけかきわけおしっこをさせ、また元の所へもどるのは大変なことでした。防空壕の中で一夜を明かし、翌朝、兵隊さんが何丁目から何丁目はどこどこへ行きなさいと指示し、整理されました。みんな親戚の所や知り合いの所へ疎開して行きました。私達は杉並の収容所に行くよう指示されましたが、子供三人を連れて歩いて行くことは困難とわかると、浅草の永住町の継母のいとこの所の一角だけが焼け残ったということを聞き、そこに行くことにしました。永住町に行くことにしたものの主人がいくら待ってももどって来ません。当時、消防団長をしていた主人は、隣近所の見回りと荷物をリヤカーに積んでこようと思ったようですが、全身大やけどで水槽の中に首をつっこんだままのところを助けられたようです。はいていたゴム長も火にとけていたとのことです。浅草寺病院に運ばれたということでそこに行ってみると、主人は全身包帯でぐるぐるまきになっていました。病院は負傷者で満員で、足のふみ場もない程でした。

私達親子は、おしっこやうんこでびしょびしょの姿で継母のいとこの所に身を寄せました。それまで何回となく防空訓練を行いましたが、いざという時は何にもならず、生命が助かっただけでも不思議な位でした。

継母のいとこの所は、四畳半・二畳・六畳のせまい家で、赤ちゃん一人いましたが、よく面倒をみてくれました。いとこの主人は、すでに兵隊より帰ってきていました。そこから毎日浅草寺病院の主人を見舞いましたが、ぐるぐるまきになっている包帯をとりかえる時は、ビリビリとひふがはがれ、その後はじゅくじゅくしていて、見てはいられない程の痛ましさでした。満員だったベットも一日一日亡くなる人が出て、次から次へと空いていくのを見ると何ともいえない寂しい思いがしました。主人の容体も悪化しとうとう十二日目に息を引きとりました。

その後、船橋の海神の親戚（継母の兄の養子先）に疎開することになり

ました。いとこの主人が私達親子のために一緒に親戚まで行ってくれました。船橋に行くのに電車に乗れるところは乗って、あとは歩いて行きました。途中、いとこの主人とバラバラになってしまいましたが、行先がはっきりわかっていたのでついてから一緒になりました。

親戚の家は、母屋の他に同じ敷地内に借家をもっていて、その借家の三畳に私と子供三人、四畳半に父母と弟二人、六畳には他の方が住むことになりました。継母からは、自分達だけでいっぱいなのにどうして来たのかといやみをいわれたりしましたが、じっとがまんしました。実父は、その中、陰ながら私を助けてくれました。

私は三人の子供をかかえて、おむつも着替えもありません。船橋の警察へ行くと、スフのふろしきがほしてあり、それをもらっておしめにしました。もめん類を持っていれば、農家でいもや食物にかえてくれるのですが、着のみ着のまま逃げたので何もありません。戦後は、債券を腰にまいてもっていましたので銀行でお金にかえてもらい、やみ物資を買ってうえをしのいでいました。当時、身内でさえ何一つくれません。おなかがすいた子供が指をくわえて見ていても何もくれませんでした。赤ちゃんには、ミルクが月一回配給がありました。長男は母乳しかのまず、ろくに出ない母乳で何とか育てました。百日ぜきも、上の子供からうつって苦しんだのですが、医者にもかけないで治ってくれました。生命力の強さに我ながらおどろきました。それから、寝るふとんもないので、警察に証明書を出してもらい、船橋高校で防空ずきんをほぐしてふとんにつくりかえたものをもらいました。それで親子四人くるまって寝ました。

船橋には当時、軍需工場がたくさんありました。徴用工の宿舎を建てるために飯場がありました。飯場で職人を食べさせ働かせていましたが、戦争が終ると朝鮮の人が少しづつ自分の国に帰っていきました。そこで朝鮮の人が使っていたしみだらけのふとんやなべの穴のあいたものをもらい、穴をふさいで使いました。海神の山にたきぎを拾いに行き、カンをコンロがわりにして、ふすまのだんごをつくって子供に食べさせました。

その後、私は雑貨を売りに出ました。子供にふすまのだんごをつくり、これは昼になったら食べるんだよといって留守番をさせました。雑貨の売りあげでふすまや大根の葉っぱのすいとんをつくり、うえをしのぎました。

それから、長女をぜひほしいという人が現われ、かわいがるから、また十銭もっていつも見ていた紙芝居屋さんもくるからといわれ、長女もその気になりました。私も子供を手離すことは身を切られるよりつらいことですが、子供が食べ物も十分食べられ好きなおどりも習わせてもらえるならと思い、養女に出すことにしました。ところがその人は、はじめはいい人と思っていたのですが、後で人づてにわかったことですが、とてもひどい親だということでした。長女との別れのその時は、むこうの親と長女がじっと私達を見送ってくれました。それは、細くて白い長い長い道でした。胸がはちきれそうで、母親としてこれ程つらいことはありませんでした。それから間もなく、白い米が配給になりました。あの子がいれば一緒に食べられたのにと思うとごはんがのどに通りませんでした。その後も、私は子供二人をかかえメソメソしてもいられません。配給のお米をおにぎりにして東京に売りに行きました。おにぎりは飛ぶように売れました。ある時、やくざにおどかされ、場所代をとられたこともありました。また八個分の仕入れ額で十個分のだんごを買って売ったりもしました。

親戚にいつまでもやっかいになっているのもつらく、雨露しのげて何とか食べていければよいと思い、昭和二十年八月の終戦後、やみ物資を売っ

ていた海神の電気商の人（当時五十五才位）と一緒になりました。その人には先妻の息子と娘がいましたが、その娘に裁縫を習いに行かすために私と一緒になったようです。私は二人の子供を連れて身を寄せたものの子供が泣くと押し入れにほうり込みひどい目にあわせました。夜など子供に母乳をやると子供の足を引っぱっていじめたりして、あまりのひどい仕打ちにがまんできなくなり、一ケ月半後もとの親戚にもどりました。

船橋の廓に進駐軍がよく来ていたので、そこへ日用雑貨を売りに行きました。廓で働かないかとおかみさんから声をかけられることもありました。廓のおかみさんから、隣の人が子供をほしがっているがどうかといわれ、次女を手離すことに決めました。子供を連れていくと、おもちゃを買いに行こうといって子供を連れて行かれ、その間に私は子供の前から姿を消しました。その後、子供の姿を見たくて陰からのぞくと、きれいな洋服を着せてくれていました。ところが、今まで子供はそまつなものしか食べていないところへ食べなれないものを食べたため大腸カタルをおこし、やはり本当の親の元がよいのではないかと返されました。もどってきた次女は、顔をきれいにふいて頭をとかして人手に渡したことが子供心に焼きついていて、それからは顔もふかない頭もとかさないで、行商に行っている間おとなしく待っているというのでした。長男は、栄養失調で頭がいびつでおできができてひどい状態でした。ドカンに子供を捨て、置き去りにしようと、いく度思ったことでしょう。でもこんなにみにくい子供をひろってくれる人はいないと思うと、ふびんになって引きかえして子供をとりに行ったこともありました。毎日毎日あまりの苦しさに子供を殺すわけにはいかないが、病気で死ぬものなら仕方がないと思うこともありました。長男は、子供の頃は子供らしい笑顔を見せたこともありませんでした。子供ながらじっとたえていたのかもしれません。

私は、食べ物さえ食べさせてくれるならと三度目の夫と見合いをして昭和二十年十月結婚しました。夫は朝鮮人でとび職をしていました。当時、徴用工の宿舎を建てるために飯場がありました（朝鮮部落）。最初、子供一人ならいいといわれましたが、無理に二人を連れて結婚しました。しかし、夫は病気もちであまり働けませんでした。しかも、酒を飲むと酒ぐせが悪く、子供が大きくなるにつれ子供にあたりました。夫は朝鮮人で身寄りもなく、寂しいから子供にあたったんだなと今では思うのですが、当時は夫の胸の内を理解してあげることができませんでした。寂しいからお酒を飲んでうさばらしをするが、酒を飲まなければおとなしいんだから、お父さんを恨むんじゃないよ、と子供達にいい聞かせました。よく徴用工に配給になった米で焼酎を造り売ったりし、男達は酒を飲んでけんかばかりしていました。焼酎を造ったカスでブタのえさにしたので、ブタは丸々太っていました。その後、私は農家の草取りに出ました。農家ではごはんを食べさせてくれ、野菜もくれて助かりました。

昭和二十三年、船橋に中山競馬場ができるということで土方の募集がありました。角材をはこんだりの重労働でしたが歯をくいしばって頑張りました。でも雨が降ると働けないのでいつも働けるところをさがしました。私は、よく子供にいい聞かせました。「どんな仕事をしてもはずかしいことはない。たとえ便所そうじでも、ドブさらいでも、何でも働くよ。けっしてはじる事ではないよ」と。その後、けんてつの「ロケットみがき」の仕事があり、最初は、パートで入りましたが、やがて軍需品はなくなり洗たく機やアースのケースの塗装の下請け会社になり、はじめは景気も悪く給料もよくありませんでしたが、頑張って働いていくうちに正社員になり

給料もあがり、五十六才まで同じ会社で働き、停年退職しました。退職の前年、今から二十年前に夫がなくなり、三度目の夫との間には一男一女をもうけましたが、子供達はみんな協力して親孝行をしてくれました。

その後、別れた長女の夢を十三年目に見ました。幸せであればよいがと祈るような気持ちでした。人から聞いた話ですが、「美智子ちゃんはかわいそうだった。芸者屋に洗たく物を届けに行くうち芸者屋に売られ、二度目の里子に出された。母親は芸者、父親は画家だった。二人ともやさしくしてくれたが、病弱で働けなく、美智子ちゃん一人が働いていた。」とのことでした。でも現在は、長女も幸せな結婚をし、浦和で天ぷら屋をしております。

現在は、子供達もみんなやさしく、かわいい孫に囲まれ、ほんとうに幸せです。今後、家族がバラバラになってしまうひどい戦争は絶対におこしてはならないと思います。戦争をしらない世代の人々にどうしても言い伝えておきたくてあえて申し上げました。

